

## 編集後記

十号の編集を終わり、創刊号からの寄稿者回生別一覽表を提供して、会員の皆様のお役に立てることを思い立ちました。

創刊号の編集後記になにを書いたか、ふと開いてみて随分欲張って書いたものと驚きましたが、きつと、この会誌がこのあと続くだろうかと心配し、願いをこめて一生懸命書いた跡がみられました。

しかし杞憂であったことを恥ずかしく思います。年一回の総会・懇親会も愉しく、また欠かせないものですが、それぞれの時代の取って置きの思い出、人に聞かせてもよい小学校を出てから今日までの軌跡の一齣、聞かせてためになる研究の成果や職業体験。

文芸・絵画・音楽・旅・花・人形・・芸術活動や趣味の話、ぜひ聞きたい貴方のボランテニア、スポーツや健康法、その他笑って愉しい話等々、「千里山」にぜひ皆様のページを残してください。原稿用紙四百字詰め二〜四枚、思いついた時に書いて事務局までお送りください。お待ちしております。

いま一覽表を見ながら、千里山の人達はなんと優し

い人達だろうと胸に響いてまいります。これほど集稿率の高い同窓会は他にはないといつも感じながら編集に携わってまいりました。

編集にご協力いただいた方々、原稿をお寄せくださった方々に、心からの感謝と御禮を申しあげます。

千里山開発物語によりますと、既に大正四年（一九一五年）には北大阪鉄道の動きが見られ、千里山住宅も、彼方に百年（二〇一五年）の歴史がちらつきはじめました。父母達は日本の何処かに故郷を持ちながら、千里山に居を求めてやって来ましたが、そのまま居着いた人、人生の旅客として通過して行った人、どちらも隔てのない主体的住民でした。

なにもない処に鉄道が引き込まれ、住宅と学校ができて、無から有を生じたような、過去が少ないのだから、その文化はいつまでも自分達のものという気持ちがあるさと意識を持たせたり、生涯でいちばん懐かしい処であったりして同族意識を生みました。戦前・戦中・戦後の烈しい三重奏の変化もありました。東京の千里山会が四〇学年に近い巾の広い同窓会として、これからも楽しい憩いの場でありますよう、会誌もその一助となりますことを心から祈っております。（柿崎）